
魚人転生者と召喚被害者

浩太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魚人転生者と召喚被害者

【NNコード】

N5258X

【作者名】

浩太郎

【あらすじ】

もつとマトモにゲームやつとけば…と後悔したけどもう遅い。とあるゲームな世界の魚人に転生した女性が、召喚されたはずの甥っ子を探してまわるお話、です。

超スローペースの気まぐれ更新となります。R15も残酷描写…も保険です。

001 色々思い出しました

「…」

アレイスターは跳ね起きた。いつも室内が視界に映る。薄暗いから、まだ夜明け前なのだろう。どくどくと激しく脈打つ胸、頬にかかる赤毛。段々と冷えてくる汗が冷たい。

「… もっと…」

震える両手を動かし、ゆっくりと顔を覆う。

「… もっとレベル上げておけばよかった…！…」

吐息混じりに吐き出したあと、そういう問題じゃないと気付いた。

アレイスター・ゴメスは魚人族の雌性体、孵化してから6年になる。群れには属していない。海流に乗った卵が、海洋学者ロザリア・ゴメス博士の水質調査用の仕掛けに引っ掛けたのだ。以後、育ての親である博士とこの離島で2人暮らしをしていた。1週間前まで。山下透子やましたとおこは人間の女性体、享年32才。結婚はしていないが時流など関係ない安定した企業に属していた。甥っ子と2人暮らしをしていた、のだが…。さて、どれだけ前のことが。

アレイスターは今朝方、自分にもう一人分の記憶があることを知つ

た。

記憶の中で、自分は山下透子だった。性格があまり変わつてないためか、記憶が増えても違和感はない。2人分の記憶はY字の様に混ざりあって、現在の彼女に続いていた。

だから、それはいい。いやよくないか？思い出した記憶に2つ問題があった。それ以外は普通の女性の記憶だ。まあよい。

問題の一つ目は、この世界が、透子のやっていたゲームそのままだということ。

問題の二つ目は、透子と甥っ子が、召喚被害者だったのではないかということである。

002 問題の一つは、頑張つてもムダだつたこと

さて、問題の一つについて言及したい。

問題の一つは、この世界が、透子のやつていたゲームそのままだということ。

それが何故問題になるかと言えば、透子の設定したキャラクターと、ゲームに対する態度にある。

…もつとまともに設定しておけばよかつた…！

アレイスターは魔法が苦手である。呪文は噛むし、魔法陣は間違う。どれだけ練習しても上達しない。魔力測定機では程々に高い値が出たものの、博士からは「なんていうか…人には向き不向きがあるから、落ち込むんじゃないよ」と生暖かい視線を向けられた。

ならばと努力した武器の扱いはどうかと言えば、こちらもさほど上手くない。アレイスターは体格にあまり恵まれていないため、当たつても威力が見込めない。では手数を増やせるかと言うと、普通に60代の博士に負ける。

博士は「私もさほど得意じゃないけど、人よりちょっとはマシよ」と苦笑を漏らしていた。

つまり、彼女はどれだけ頑張つても、魔法も武器も普通に届くか届かないかといったところ。座学、特に理数科目は博士も訝しむ優秀さであったのに、この事実は彼女のプライドを傷つけた。自分の不甲斐なさに枕を濡らした夜も、一度や2度でない。

そして、現在の彼女は、設定したアバターの姿を持っている。赤銅色の髪に碧眼というクリスマスカラーな配色。見かけ上ハイティーンな身体。おそらく能力もゲームに準じたものだらう。投げ出した当時の。

上達しない道理である。

透子は、アレイスタを、魔法にも武器にも特化させなかつた。

透子がアレイスタに設定した特徴は、魔法でも武器でもない。

「魅力」である。

そもそも、透子にはゲームをやる習慣がない。

今回は、甥っ子にねだられたから付き合つただけというのが正しい。クリスマスに携帯型ハードにソフトと周辺機器を2人分買った時は総額に少し気が遠くなつたが、まあ親類縁者がいなくてお年玉を見込めないのでからたまには、と奮発した。透子は甥っ子に甘い。

甥っ子が欲しがったゲームは、透子は知らないがいわゆるMMORPG（多人数参加型オンラインRPG）の一種だつた。剣と魔法の世界。そこでモンスターを退治したり仲間にしたり戦争をしたり、さらには獵師になつたり教師になつたりと、喧嘩したり生活したりするのだ。政治家や官僚、外交官といった国に雇われるような難しい職はないが、かなり自由に活動できる。また、キャラクターのアバターや能力値、操作性の設定などについて、かなり自由度が高かつた。自由度が高い分難易度も高い。それがこのゲームの魅力であ

る…。

と、透子は甥っ子に聞いた。細かいことはわからない。世界中で何億人が遊んでようと、透子は受けとった甥っ子が喜べばそれでいいのだ。

初心者をあまり意識しない作りなのだろう。キャラクターのステータスやアバターも甥っ子に大分助けられながら設定したのだ。
しかも、甥っ子の助言を聞き流しつつ。

- 魚人にするの？

- うん、魅力を高めればボコさず仲間に出来るみたいだから。
魚人が一番魅力高いからさ、むんむんなねーちゃんにするの。
- 攻撃手段もあった方がいいんじゃない?
魔法が使える様に、もうちょっとこっちに割り振らないと。
- んー、魔法じゃなくて、これがいいな。
二刀流。

- とー、魚人は前衛には向かないよ。

- いいの。

ちまちまやるのは趣味じゃないから、とにかく剣でぶつこむか

らー。

- 僕、剣士にしちゃったけど。

一緒にやるならバランス悪くない?

- 2人で突つ込めばいいじゃん。

- …早く転職するから。

それまで待つて。

- ? うん。

あ、ひーちゃん、もっと、JPF、Hロロい感じでー。

- ヒーは「んなもんだよ。

- なんだとうーー?

…ああ、ひーちゃん、なんでもっと止めてくれなかつたの…！

もつと適正に合わせて設定すればよかつたと後悔しても後の祭り。
種族特性無視なアレイスタが出来上がつた。

どれだけ頑張つても上達しない訳である。

そんな感じで始めたゲームだが、透子はあまりゲームにのめり込まなかつた。

なにしろ、自由度が高い分、難易度も高い。チュートリアルさえこづつた彼女は、途中から完全に放置していた。ゲームのタイトルさえあやふやである。

たしか、レベルを上げると転職が可能で、カンストすると転生してレベル上限が増える、んだつけ。いくつだったかな?と、隠げにしか覚えていない。なにしろ、透子には遠い世界だった。

それでも、甥っ子の手前、じわじわとオフラインでクエストをこなそうと頑張り、レベルが上がるたび「えられるボーナスポイントを「魅力」絡みのスキルに割り振り。

ようやく、スキル「美しければそれでいい」から、スキル「美しいは罪」に成長させたところだった、のだが。

…こんなことになるとわかつていれば、もつと役立つスキルにしておいたのに。

後悔先に立たず。

アレイスターは、その言葉をしみじみと噛み締めた。

次に、問題の2つ目について。

問題の2つ目は、ひょっとして透子と甥っ子が、召喚被害者だったのではないかと思に至ったことである。

なぜそう思ったかといえば、透子であるところの自分の最期…なんというか、そう考えると微妙な気分を味わうのだが…が、昔観た映画を思い起しかねせるからだ。

オズの魔法使い。

忘れもしないと言いたいが、きれいさっぱり忘れていた、あの日。5月のゴールデンウィーク空け。参観会の日であった。

甥っ子は隠そうとしていたが、透子はすでに仕事を調整し、年休を取得していた。ママ友メーリングリスト悔るなけれ。両親がいい今、彼の参観会に参加するのは、透子の義務であり権利なのだ。外で保護者と居たがらなくなつた甥っ子を宥めすかし、父兄会の後、一緒に帰る約束をした。

帰り道。

靴を履き急いで出て行くと、甥っ子は友達グループと校庭で遊んでいた。透子に気付いたのか、別れを告げてこちらに寄つてくる。が、透子の顔を見て、少し顔をしかめた。手を繋ごうとしたらしつと無視された。ああ、子供の成長とは切ないものだ。

しばらく無言で歩いていたのだが、甥っ子は我慢出来なくなつた

のか、斜め後ろを行く透子に話しかけた。

…向こでしゃじてゐる。

…にせにせなんて。

ね、外では、オレって言つてゐるの？

…

…もー、悪ぶっちゃって、カ・ワ・イ・イ・

…うっせ…

吐き捨てた後に速度を上げた甥っ子に、おいて行かれまいと慌てて追い縋る。

…おおう、ひーちゃん。

…ちょっと待つてよ。

大丈夫、理解してるよ。

ワルぶりたいお年頃だよね！

親指を立てた透子に、甥っ子の冷たい視線が刺さる。

…マジウザい。

それに外では呼ぶなつたじゃん。

…ひーちゃん…！？

…だからその…？

…！

透子は、話してゐる途中で気が付いた。そして固まつた。人間、信じがたいものを見ると、頭が真っ白になる。

蛇行するトラック。所々で人や自転車を引っ掛け、こちらに向かつてくる。

視界の隅で、振り返つた甥っ子が、透子の顔を見て同じ方向を向き、やはり動きを止めた。

その甥っ子を見て、透子は縛りが解けた。慌てて、彼との距離を詰める。

その時には、もうトラックは田の前だつた。

とつさに田の前の甥っ子を突き飛ばそうとした、ら、なんと、彼は驚きの反射神経で透子の延ばした腕を掴んだ。そのまま投げ出され、透子は甥っ子の横を摺り抜けた。

一瞬なにが起きたか分からなかつた透子は、心の中で悲鳴を上げる。

…なんで大人しくしてないの、ひーちゃん…

交差する瞬間の甥っ子の顔は見えなかつた。

後ろに迫る大きなトラックの陰は、よく見えたのだけれども。

-ひーちゃん…！

透子は甥っ子の名前を叫んだ。転倒時に地面についた手のひらと腕、顔、足に、コンクリートで擦つた痛みが走つたが、意識の外だつた。

転倒した体を急ぎ起こした透子は、目を見張った。

鈍い音を立て、トラックがふとんだ。

スローモーションの様に落ちていくトラックを、呆気にとられて見送る。地面に叩きつけられ、轟音をあげた。火を吹いた。驚いて反射的に目をつぶつて首を竦めた。熱風が横切っていく。ゆっくりと目を開ければ、そこに先程までの驚異が見える。何が起きたかマイマイ理解できなかつたが、頭を振つて切り替える。危機が去つて、甥っ子に怪我がなければそれでいい。

と、首を巡らせようとした刹那、息を呑む音が聞こえた。

「…ッ！」

よく見れば、甥っ子を中心にして、つむじ風が起きている。風が巻き込んだのか、甥っ子の左手の甲から鮮血が溢れた。押さえた右手から零れた血が、つむじ風にまかれて螺旋を描くのを見て、透子が悲鳴じみた声をあげた。

「ひーちゃん！！」

「…ばかッ、とー、止めるーー！」

透子は、甥っ子の制止を無視し、つむじ風に飛びこんだ。体中を引き裂く痛みを無視し、甥っ子を抱え込む。

その直後に、全身に衝撃が来た。
目の前が真っ暗になった。

最期は、多分、どこかの室内だつた。
重い瞼を長い時間かけて無理矢理こじ開けたら、白茶けた四角い
間口から人影のような揺らぎが見えた。
だから、必死に甥っ子を頼んだ。身体がひたすら重くて鈍くて、
声となつていたかは分からないが。

「…ドロシーは、帰つたよね？」

甥っ子は、無事だつたろうか。
透子の家族は、怪我などしなかつたか。

ここにはいないかもしれないが、じつとしていることもできぬ。

だつて、たつた一人の家族だつたのだから。

004 お客様が来ます

アレイスターは黙々と荷作りをしていた。少し苛立ちながら。

思い立った。ではなく、思い出したが吉田。今日はこの島に人が来る予定だったので、帰りの船に同乗させてもらえればいい。元から、博士の遺言に従つて島を出るつもりだったのだが、少し迷ったといえ、片付けも済んでいたようだ。

苛立つているのは、片付けにっこりではない。この世界の仕様のためだ。

トランクにパンツをつっこむ。

視界の隅で文字が踊る。

【「古びた革製トランク」に「履き古したパンツ」を収納しました】

トランクに上着をつっこむ。

視界の隅で文字が踊る。

【「古びた革製トランク」に「着古した上着」を収納しました】

トランクに歯磨きをつっこむ。

視界の隅で文字が踊る。

【「古びた革製トランク」に「使い古した歯磨き」を収納しました】

「…ウザ…！」

いままでは、「こういうもの」として気にしたことがなかつたが、透子の生活を思い出した後だ。何をしても流れしていく文字が、ちらちらと視界を狭める。これが実に鬱陶しい。自分の状態を把握出来るようになれば、これを流れないようにもできる、と博士が言つていたが、早くそなりたいものだ。

と、視界の隅に黒い影。

「…ツ逃がすか！」

すかさずスリッパを構えたアレイスターは、その影を捕らえた。すぱーん、と景気がいい音が響く。

視界の隅で文字が踊る。

【ゴキブリ】を仕留めました

【仕留めたゴキブリの通算が50匹になりました】

【称号「油虫の狩人」】を取得しました】

【スキル「スリッパ早打ち】を取得しました】

「…要らねえ…！」

アレイスターの呻き声が室内に響いた。

余談だが、彼女は100匹蠅を退治した人間が取得する称号、「フライ・キラー蠅の殺戮者」も持っている。スキル「蠅叩き早打ち」はレベル2だ。

双剣技の取得スキルには、レベル2に達したものはない。

住居のある離島、大地母神の枝毛 - - ふざけた名前だといつも思うのだが… - - は、つい先日まで博士とアレイスタしかいなかつた。今はアレイスタだけだ。なので、最寄の大きな島にある雑貨屋から、生活用品が届く。

届けてくれるのは、漁師のレネ爺さんだ。この島には彼の船以外は来たことがない。付近の海流が複雑なので、慣れない者では潮の流れが読めないのだ。

アレイスタは今まで島から出たことがないので、会ったことがあるのは4人だけ。一緒に暮らしていた博士、たまにくるレネ爺さん、一度訪れたゴメス家顧問弁護士のサー・ウォルターと雑貨屋のミス・リップ。全員人間だ。

今日は、レネ爺さんが、サー・ウォルターとミス・リップ、それに後3人を案内して来る。アレイスタが生活し始めてから、一番多い人間を見ることになる予定だ。

博士の葬儀と遺言の開示のため。

もう昼だから、そろそろ着替えた方がよさそうだ。昼の準備も必要だらう。

アレイスターは素早く身支度を整えると、昼の軽食を準備するために台所へ降りた。

005 サー・エセルバート・ゴメス

サー・エセルバート・ゴメスは親切な男だ。

…ありがたいはありがたいんだけど…。

自分の対面に座る優雅な男をちらりと伺うと、ぱっちり目が合つた。どうやら、こちらをずっと見ていたらしい。にこりと笑う男に引き攣りながらも笑みを返し、アレイスタは内心ため息をついた。狭い馬車の中、視線で息が詰まりそうだった。

博士が亡くなつた後すぐに、アレイスタはサー・ウォルターに連絡をとつた。サー・ウォルターからは、博士の弟であるサー・リチャード・ゴメスと、その次男たるサー・エセルバート・ゴメス、それに司祭と連れ立つて島に行く旨書かれた手紙を受けとつた。博士の希望通りに亡きがらを葬るために、遺言状の立会人であったレネ爺さんとミス・リップには、アレイスタからお願いをした。

手紙を受け取つたアレイスタは、少なからず覚悟をしていた。義叔父と義従兄にとって、自分は招かざる客だろう。今時分継子いじめもあるまいが、博士の厚意がよくない結果を招くかもしれない。

結果として、それは完全な杞憂に終わった。

レネ爺さんの船から降りてきた彼らは、非常に紳士的だった。

義叔父のサー・リチャードは、色の薄い金髪に青灰色の目、彫りの深い顔に高い鼻といった、姉たる博士と似た風貌で、男振りもよ

かつた。しかし、瘦せ型だつた博士に対して、彼は体格に恵まれていた。物腰も雰囲気も柔らかく、博士が峻厳たる冬の海をなら、サー・リチャードは春の温かさがあつた。

対して、義従兄のサー・エセルバートは、初めのうち、完全に一線を引いていた。彼も父親と同じく穏やかな雰囲気をまとっていたが、初対面特有の見えない壁の向こうにいた。時折、視線を感じて顔を上げれば、すっと顔を逸らす彼が見えたので、警戒されていたのかもしれない。

ただ、ミス・リップは船の中で彼を気に入つたらしく、あれこれと話しかけていた。その対応から見て、悪い人物ではなさそうだとアレイスタは判断した。特に言葉をかわすことはなかつたが、葬儀後に家に招いた時には、視線が合つても顔を逸らされることもなくなつたので、短い時間だつたが無害と伝わつたのだろう。

二人が穏やかな人物だつたので、軽食を勧めたテーブルでは、和やかな雰囲気で故人の話題を持てた。サー・リチャードが知る博士は、アレイスタやレネ爺さん、ミス・リップが知る彼女とは異なる。博士が幼い頃の話を聞き、ここで生活していた時の話をした。彼女について一番網羅的に知つていたのはサー・ウォルターだつたが、彼は自分から話すことはなく、嬉しそうに相槌を打つていた。故人を直接知らない司祭とサー・エセルバートは聞き役だつたが、気まずさを感じさせるようなことはなかつた。

思えば、皆さんのが帰られるという頃、そういえば帰りに同乗させてもらえないか、とお願いしたことが発端だつた。

「お嬢ちゃん、ここを離れるのかい？」

「危なくないかい？」

顔に、心配、と貼付けて、レネ爺さんとミス・リップが言った。

「はい、博士に同胞を捜す様に言われています。

今から暖かい季節になりますから」

「…貴女が一人で？」

その低い声に驚いて、アレイスターは動きを止めた。見れば、ほか
もぴたりと口をつぐみ、驚きに目を軽く見開いている。

その声を発したのは、それまで穏やかな笑顔で話を聞いていたサ
ー・エセルバートだつた。笑顔のままだつたのに、不思議なことに
洞窟されていくよつた気分になる。

「はい。その予定ですが…？」

首を傾げながら、はて一体彼は何が気に入らないんだろうと問え
ば、声がより低くなつた。笑顔のままなので怖い。

「…女性一人で行かれるつもりだと？」
「ええと…」

他人を雇えるほど金もないし、他にいないのだから仕方ない。博
士の遺産をいただいたが、それを使つ氣はなかつた。

「でも、これもありますから」

そう示したのは、博士の形見の懐中時計。さきほど、彼女の所有
として登録されたものだ。実は身を守るための魔道具だと聞いて断

つたのだが…

「貴女は先ほど、剣も魔法もあまり得意でないとおっしゃつていたでしょ？」

身を守る手段はたくさんあつたほうがいい。

邪魔になるものでもないですから、取つておいて下さい。

…と、サー・リチャードに笑顔で押し切られた。

懐中時計を見た後、少し考えたサー・エセルバートは、にっこり笑つて言つた。

「では、身を隠すための魔道具を準備しましょ？」

女性一人だと危ないですから

「え、いえ、その、そういうものを準備するお金は…」

「こちらで準備しますよ、従妹殿」

「そんな高価なものを準備していただくわけには」

「貴女は先ほど、剣も魔法もあまり得意でないとおっしゃつっていたでしょ？」

身を守る手段はたくさんあつたほうがいい。

邪魔になるものでもないですから、取つておいて下さい」

…あれ、どつかで聞いた台詞だなとアレイスターは思つた。

「まあまあ嬢ちゃん、せっかくだからもらひておきなよ
「なあ、せっかくだんがこう言つてくんださつてるんだ」

「女性ひとつは危ないですからね」

「こういった準備はしそうる」とはないですよ」

「息子の言つとおりですね」

周りを味方につけられて笑顔で押し切られ、結局断れなかつたと

「いつも一緒にいた。さすが親子だ、よく似ている。

エセルバート卿は、何でこんなに親切なんだ。

その後、レネ爺さんの船の人数制限に引っかかると聞いたアレイスターが、荷物だけ載せてもらえれば泳いで行くと言つたら、また怒られた。

「ええと、では歩いていきます」

魚たちはアレイスターに親切だ。それこそ、皿を持って立てば、集まって先を争い勝手に皿に飛び乗つてくるほど。言葉がわかるので、食べる気は起きなし、正直、その気遣いが重いので勘弁してほしいと思つてゐるが、頼めば上を歩くくらい余裕だろう。バランス感覚は必要とされそうだけれども。

と、伝えたのだが。

「…私と一緒に待つていましょうか」

「いえ、そんな手間ですし。

私は魚人族なので…」

別に濡れるとか気にしない、と言いたかつたのだが。

「私と一緒に待つていましょう」

あれ、上から被された。

「俺はそれでいいぜ、嬢ちゃん。

大した手間でもないしなあ」

「せつかくだから甘えたらどうだい？」

一人で待ってるのもアレだしねえ」

さつきもこの展開だった気がする、と思ったが、結局アレイスターは彼と一人でレネ爺さんを待つことになった。

別れ際、なんだか妙に可笑しそうな顔をしたサー・リチャードと目が合つたと思ったら、彼は片目をつぶつて見せた。

「まあ、そんなに困った顔をしないでください。

私もあるの子と同じく、貴女をとても好ましく感じています。

こちらに来ていただけないのは残念です。

機会があればぜひお立ち寄りください」

歓迎はされそそうだが、面倒なことになりそうだな、と思いながら返事をした。

しかも、気づけば王都に向かう馬車の中、向かいあつて座っている。

確かに、「王都には腕のいい魔道具が集まるんですよ」と聞いたときは断つたのだが。何がどこでこうなったのだ？…従兄怖い。そして視線が痛い。笑顔なのに痛い。

アレイスターは博士と2人暮らしで、他の人間にほとんど会つた事がない。そして透子は日本人だ。人と視線を合わせるのは苦手だつ

た。

彼は、ため息をついたアレイスターを気にせず、そのまま言葉を向けてきた。

「貴女は、叔母のことを持ててましたんでですか？」

その言葉に、アレイスターは呼び方を変えた日のことを思い出していた。アレイスターと博士は義理の親子に当たる。それは、手続きが完了した日のことだった。

「アレイスター、私と貴女は親子ですね。」

「はい。」

「では、私のことを博士というのは少し他人行儀過ぎて不適切ですね。」

別の呼び方を考えなさい。

「別の呼び方といつと…。」

「一般的に、母親のことは母様かわさまなどと呼びます。」

「はい、母様。」

「よひしい、ターシャ。」

「いえ、母様と」

「なるほど。」

そして、貴女はなんと呼ばれていたんですか？」

「ターシャですが…」

何が言いたいのだろう、と首を傾げる。

「従妹殿、私と貴女は従兄妹どうしですね」

「はあ」

「私のことをエセルバート卿というのは少し他人行儀過ぎて不適切ですね。

別の呼び方をお願いしたいのですが」

あれ、また何か記憶に残っているのと同じやり取りだなとアレイスターは思つた。

「別の呼び方といいますと…」

「私は、親しい人にはエセルの愛称で呼ばれています」

なんというか、この難儀な性格はゴメス家のものなのだろうか。あまり、博士に押しの強さを感じたことはなかつたアレイスターは、顔を引きつらせた。

「あの、私は」

まだ親しくはないのですが、と言いたかつたのだが。

「エセルの愛称で呼ばれています」

あれ、また被された。

「…はい、エセルさま」

「よろしい、ターシャ」

サー・エセルバート・ゴメスは親切な男だ。
多分。

そして、押しが強い。

その親切さと押しの強さに、アレイスタはドン引きである。

006 奇襲を受けました

「大地母神の枝毛」島から、王都ロルーへ至るには、大陸の最寄の漁村へ船で1時間、漁村から馬車で州都へ1日半、州都から転送陣で一瞬、といった道行になる。漁村からの馬車は、サー・エセルバートが待させていたものを利用した。サー・リチャードとサー・ウォルターは一人ともゴメス家領ホルスコから来たため、漁村からそちらに道が分かれている。

サー・エセルバートが事前に転送陣の利用申請をして予約を取っていたので、最短時間で王都に着くことができた。途中の息苦しさを思い出し、アレイスタはほっと息をついた。

アレイスタは博士以外の人間と親しくしたこともなく、透子はモンゴロイド以外になじみがない。だから、外人男と間近に接しているのはしんどかった。なによりでかい。分厚く筋肉がついているというわけではなさそうだが、骨格が違うのか圧迫感が半端ない。笑顔を向けられているとはい、いやだからこそ、余計に怖かつた。とにかく着いてよかつた。

ちなみに、道中の車中泊はアレイスタだけで、サー・エセルバートは御者とともに野営した。このときほど彼が紳士でよかつたと思つたことはない。一時に圧迫感から開放され、本当によかつたとしみじみ思った。

それに、なんだかんだ言いくるめられて、結局魔道具の通信石を渡され、2日に1回は彼に現況を報告することになってしまった。また長く付き合つと何かしら押し通されそうで怖い。

転送陣のあつた大きな建物は、比較的多くの人がいたようだ。出れば、陣の利用客目当ての辻馬車を多く見た。

初めて見た王都は、州都よりさらに大きかった。漁村と変わらず焼煉瓦で出来ているものがほとんど、大きめな建物は石造り。2階建て以上の建物も多い。

透子が透子のままで初めて見たら、異国情緒漂うその光景に感嘆の声を上げただろう。が、アレイスターが住んでいた家も似たり寄つたりな作りだつた。

アレイスターがアレイスターのままで初めて見たら、人の多さに驚いただろう。が、透子が住んでいた東京ほど人が多くも大きくもなかつた。多分、総人口も全然違うのだろう。

そして、透子であるアレイスターはそのことに気づいて、なんとか損をした気分になつた。とはいへ、多種族入り乱れる通行人は、一見の価値があつたが。

2人分の荷物を持つた--断つたがやはり断り切れなかつた--サー・エセルバートが捕まえた辻馬車に乗り込んだ。御者への指示を聞けば、王都の内郭に向かうようだつた。

アレイスターがいる間は一緒に宿をとると言つてていたので--こちらもやはり断つたのだが--そちらで宿を探すのだろう。彼は王都に就職先から斡旋された住居があるとのことだつたが、そちらは関係者以外立ち入り禁止らしい。

彼が選んだ宿は、上品だが気さくな雰囲気だつた。サー・エセルバートが手続きをしている最中、ホテルというよりは民宿かなあと

宿内を見回していたアレイスターは、そこで奇襲にあった。

その宿屋にはペットが飼われていた。毛足が長い金茶のたれ耳の大型犬と、太り気味の三毛猫。2匹が宿の待合室奥で転がっていたのを見て、アレイスターは呼び寄せるようにちっちつちと音を立てた。アレイスターは動物が好きだ。

と、耳をぴんと立てた猫が、すさまじい勢いで走ってきた。アレイスターは思わず身を引いた、のだが。

「げふッ」

弾丸のように走ってきた猫は、そのままアレイスターの腹につっこんだ。うめき声を上げたアレイスターの体に爪を立ててよじ登り、肩にちょいちょいと体を落ち着けることが出来たらしい。

ざりざりとした舌で頬をひたすら舐められた。もう片方の頬に体を擦り付けられていいせいで、振つているらしい尻尾が、しきりと額を打つ。

なんの嫌がらせだと思ったが、喉をごろごろと鳴らしているということは、猫は上機嫌なのだろう。魚の味がするのだろうか。

と、今度は後ろからどしりと足に重量級の衝撃を受ける。たまらず膝を着けば、のしりと背中から圧し掛かれた。はつはつはと生臭い息が、猫と反対の頬にかかり、べろんべろん舐められた。

ひいいい。
生臭いいい！

2匹に嘗め回され、顔を覆っていたベールが帽子ごとずりずりと落ちてくる。左右前後に揺さぶられて、段々と態勢がつぶれてきた。

あ。これはやばいかも、と思ったところで。

「ターシャーー？」

「…！」

お、お客様！申し訳ありません！

大丈夫ですか！？

助かつた。

ほつと息を吐いたところで、視界の隅で文字が踊るのが見えた。が、それは気づいたときには消えてしまって、読み取れなかつた。

なんとか犬と猫を引き剥がし、借りた部屋に移動した。まったくはがれようとしている彼らは、頼めば離れてくれた。むしろ、すみませんすみませんと謝り続ける宿の方方が、扱いに困つた。おかげで宿代が安くなつた。

…何が彼らをそこまで駆り立てたのか…。

よだれまみれになつたアレイスタは深く部屋のソファに座り込み、ため息をついた。

「大丈夫ですか？」

「…なんとか」

どうぞ、とサー・エセルバートが、茶を入れてくれた。まめな男

である。アレイスタはありがたくそれを受け取った。

「今後の予定について、少し見直しませんか」

ソファで一息ついたところで、向かいに腰を下ろしていたサー・エセルバートが声をかけてきた。

当初馬車の中で相談していた予定は、こうだ。

- 1・魔道具を購入する。もしくは製作を依頼する。
- 2・魔道具が手に入るのを待っている間に、
 - 2・1・情報提供依頼を出す。
 - 2・2・旅の準備をする。
- 3・魔道具を受け取ってから旅に出る。

「見直しといふと…」

転送陣の利用も、辻馬車の利用でも、特に時間をとられない。今は暇さがりで外出を見送る時間でもない。

さて、どこを見直す必要があるだらうと首を傾げ、自分の格好に気づいた。

アレイスターは、一昨日から同じものを着ている。首まで覆う黒のドレスに、顔を覆う黒いレースのついた帽子。そう、彼女は喪服のままだった。移動には適さないので着替えようとしたのだが、このままでと押し切られてしまった。サー・エセルバートは着替えたくせに。

それが、犬猫に揉まれて毛まみれ、よだれでぐちゃぐちゃだ。なんか妙なにおいもある。宿の従業員が洗濯屋に出してくれると言つ

てくれていたから、着替えてお願いすればいい。

「…すみません、着替えますので、少し待つていていただけますか」

「いえ。そうではなく…
服を新調しませんか」

「…?
なぜ…?」

洗えばきれいになるはずだ。それに、他にも服は持つてきている。
「気分を悪くしたら申し訳ありませんが、貴女はあまり外に顔を出
さない方がいいでしょう。
他に顔を隠せるようなものがあればいいのですが…」

隠せば少しはマシでしょう、そう言つてアレイスターの方を伺う様
なまなざしを向けてきたので、彼女は首を横に振った。

そもそも、なんで顔を出したら不味いんだろう?

怪訝な顔をしていたのがわかつたのか、彼は少し言ひよどんだ。

「貴女は魅力の力が強すぎます。

危ないかもしけないので、あまり顔を出さない方がいいかと」

「…?
よく分からないのですが…」

透子は、もちろんそれを知っている。そういう風に『アレイスター』を作つたのだ。しかし、それで街中で問題が起きるようなことはなかつた。フィールドであつても、ほとんど力にはならなかつた。どれだけ、魔法か剣かに偏らせて作ればよかつたと後悔したことか。

敵を倒してから仲間にすることができるとわかつてからは、特に。

「私は、スキル「力量把握」を持っています。

あなたは、自分のステータスを確認できますか？」

「いえ、まだ…」

そうですか、と頷いたサー・エセルバートは、貴女の魅力の値は、少しありえないくらい高いんですよ、と苦笑した。

「そのままだと問題が起きやすいのではと案じています。
先ほどのように、犬猫だけで済めばいいのですが」

「…」

魅力は、いわゆる『敵』、モンスターにしか影響を及ぼさないはずだ。ましてや街中でなど。ステータスは、戦闘行動の出来るフィールドでしか効果がないものだ。村人に攻撃できないのと同じである。

「服を買つだけなら、大して時間はかかりませんよ。
魔道具ができるまでの間でしょうし」

何かあつたら危ないでしょ？

「にっこりと笑われて、アレイスタは、頷いた。反対するほどのことでもないというのもあるが、この笑顔を見ると勝てる気がしなくなってきたのだ。

ナンパ2回、養女にならないかとの誘い3回、人買いによる誘拐未遂1回、迷子に懲かること1回、荷物引きのロバに甘噛みされる」と1回。

服屋や雑貨屋が軒を連ねる界隈に着いたころには、アレイスタもなんとなく事態を理解した。どうやら、魅力ステータスは街中でも影響を及ぼすらしい。というか、町だからとか、そういうのは関係ないのかもしない。リアルだとしたら当然か、とアレイスタは納得した。普段着に着替えたとはいえ、ちぐはぐながら顔を隠すために喪服の帽子はかぶつたままだったのだけれども、30分弱で着くと聞いていた道程に1時間ちょっととかかった。

ちなみに、誘拐犯は、離してくださいとお願いしたら離してくれた。いい人で助かった。

もつとも、途中でサー・エセルバートが走っている馬車に乗り込んできたのが怖かったのかもしれない。正直、アレイスタも怖かった。なまはげかと思った。

古着屋で適当に買った頭巾を深くかぶり、かつ襟を引き上げて、アレイスタは頭を下げた。

「…」迷惑をおかけして、すみませんでした
「いえ、何事もなくてよかったです」

すっと出された腕につかまつた。浚われたあたりで、危ないからと腕を組むことになつたのだ。断つたが無言の圧力に屈したアレイスタは、体格の違いから抱つこちゃん人形を思い出して情けない気分を味わつた。

「魔道具を商つているよつた商店は、またちょっと離れた場所にありますから」

そう説明しながら通りで辻馬車を捕まえたサー・エセルバートに
続いて、アレイスターも馬車に乗り込んだ。

闇話001 サー・エセルバートの場合（前書き）

主人公格周りの人々の視点でお送りします。

関話001 サー・エセルバートの場合

その一。

サー・エセルバート・ゴメスことエセルバート・ゴメス・北征勲爵士あるいはグラント・キャプテン（勇敢なる大尉）・エセルバート・ゴメス。親からいただいた爵位と名前を格式ばつて言つならば、エセルバート・ルイス・アカーテース・セツ・ゴメス・ローウェル＝トゥーロ（トゥーロ子爵エセルバート・ゴメス・ローウェル）という、長い名前を持つ男の心情に関する話。

絶世の美女というわけではない。成熟した女性が好まれるエルゲントス王国では、基準から外れるだろう。

顔立ちは整っていたが、その表情には憂いや妖艶さといったものは無縁で、愚直な幼さが残っていた。緑色の目だけは文句なしに美しかつたが。

赤銅色の髪は短めで、礼儀にしたがつて（一）伸ばされたのは襟足のみ。それもおおざつぱにまとめてあつた。

すんなりとした手足に、ささやかなながら丸みを帯びはじめた未発達な身体。あるいは、魚人族の女性はそういう体型のものなかもしれない。

エセルバート・ゴメスには、特にこれといった性癖はない。ごく一般的な基準で美しい女を好んだ。

つまり、アレイスタは彼の好みから外れていたのだ。彼に少女趣味はない。

…少なくとも、外れていたはずだった。

初めて会った義理の従妹とは、なかなか気持ちがよい距離を保つていた。

幼さが残っているせいか、年頃の女性特有の押し付けがましさも自意識過剰さもまだなく、かといって頭の回転は悪くない。弱腰などころはきになるし、緊張感をもつて恋愛を楽しむ相手としては足りなかつたが、気楽な会話を楽しむ相手としてはちょうどよかつた。

しかし、それは馬車に乗っている間の話だ。

街を歩いていてふと横を見れば、彼女がしばしば姿を消していた。急ぎ振り返れば、そのたびに何かしら巻き込まれている彼女にいい加減呆れた。そのたびに彼女はペニペニ謝ってきたが、世間知らずにもほどがある。

彼女が男に声をかけられたのを見て、不愉快に感じた自分がいた。大体、少女のような姿形のもに何を考えているのだろうか。肩を抱いて彼女を引き寄せたら男は慌てて去つていったが、肩の小ささに驚くと同時に、危機感のなさに少し腹が立つた。

伯母の家では少女がひとりで、と魔道具を持たせることを主張したが、そうしておいてよかつたと思った。

だが、さすがに馬車に押し込まれているのを見つけたときは、洒落にならないと血の気がひいた。

とつさに体が動いた。能力を隠すこともせず走つて馬車の後ろに飛び乗り、強引に扉をこじ開けて入り込んだ。飛んでいった扉に驚いた民衆がいたようだが、知ったことではない。

車内には3人が乗り込んでいた。強引にアレイスターを持ち上げて押し込んでいたところを見ると、少なくとも1人は力自慢の獣人だらう。

急に馬車に入り込んだエセルバートにひどく驚いたようだったが、反応は早かつた。全員一斉に懐から銃を抜いた。

が、エセルバートの方が早かつた。

2人は抜いた銃ごと腕を壁に縫いとめ、1拍遅れてもう1人を足で対面の扉に縫いとめた。スラックスの下には、鉄骨の入っている軍用ブーツを履いていたせいで、ぎしりと扉がきしむ。

「つかはッ…」

最後1人は、足を使って首ごと縫いとめたせいで、呼吸が厳しいようだつた。が、この程度で死ぬこともないだらう。

喉がつぶれたとしても、エセルバートが気にするようなことでもない。

少し動いたせいで、上げていた髪が乱れて一筋落ちてきた。首を振つて目から払い、顔を上げればアレイスターと目があつた。怯えさせないよつこにこつと笑つたら、はじかれたよつこびくつと肩を揺らした。

「ああ、怯えさせたか…（ 2 ）

内心ため息をついたが、外に出すようなマネはしない。笑顔のまま問いかけた。

「大丈夫ですか？」
「あ…、は、い…？」
「ありがとうございます…」

顔が青ざめている。が、彼女はベールの奥の目をそらしたりはしなかつた。

と、ずるずると背もたれから落ちた彼女が笑い始めたので、鞆がはずれたのかとぎょっとした。すべり落ちたため、帽子が彼女からズレて、顔がさらわれる。

「え、ちょ、大丈夫ですか…！？」
「…は、はは、ははははは…助かっただ…」

ひとしきり笑つた後、彼女はへによりと笑つた。どうしたらいのつかと内心うろたえていたサー・エセルバートは、その半泣きの情けない笑顔に固まつた。

「あの、本当にありがとうございました」

再度礼を言って彼女がにつこりと笑った。エセル様はいつでも笑顔なんですね、そう言って苦笑した彼女に、

瞬間、一瞬頭が真っ白になつた気がした。

そして、これはまずいと思った。

まずい、とてもまずい。

落ちかける感覚にぞくりとしたが、それを表に出すほど子供でもない。笑顔を保つたまま、それはよかつたと返事をする。

さて、彼女が落ち着いたのであれば、拘束している彼らをまとめ片付けて、御者の男も何とかしなければならない。視線を移せば、男たちは彼女の笑顔に晒されて、恍惚とした表情を浮かべている。なんとはなし面白くなくて、わずかに力を強めた。

めきりと骨がきしむ感触が伝わってくる。

痛みで我に返つたらしい男たちが、恐怖で引きつった顔を向けてきた。

「…！」

黒の…！？

気づいたらしい男が何か言いかけたが、そちらに視線を向けただけで黙り込んだ。顔色が青い。カタカタと振るえはじめたのが伝わってきた。すでに緊張が取れたらしいアレイスターが、よくわかつていない顔をして首をかしげている。

「…？」

ええと、私、帰りたいのですが、いいでしょうか？」

彼女の提案は震える男たちには、天の助けだつたろう。大きく頷く男たちに、どうも、と返し、行きませんかと笑顔を向けてくる彼女の気楽さにため息がこぼれそうになる。と、同時に、馬鹿らしくなった。

「行きましょうか」

そう返したサー・エセルバートの笑顔に、アレイスターがおやという顔をした。

彼は気づかなかつたが、多分それは、アレイスターに向けた中で、はじめての自然な笑顔だった。

(1) 女性は髪を長く伸ばし、ゆつたりと結うのが主流。髪が短く、かつそれを晒している女性は、犯罪者として刑罰を受けたものと見られた。

(2) 動き云々より、こんな場面でも笑顔のエセルバートが怖かつた。

彼にもし心の声が聞こえていたら、

…ここでも笑顔かよ、超怖エ！

悪い子じやないので許してくださいー！

というアレイスターの心の悲鳴が聞こえていたはず。

サー・エセルバートに案内された店は、一見の価値のあるものだつた。磨かれた飴色の木材は細かな細工を施され、元の枝を生かして波のように広がる形は優美な曲線を描いていた。間の硝子で屋内が透けて見える。

それは美術品に似て、アレイスターにアンティークの戸棚を思い起させた。石と煉瓦が主な町並みに合つて、その木造建築は不思議な調和を見せている。

街路からわずかに間が空いて立てられており、1階に上がるための階段と、地下に降りるための階段が、それぞれ伸びていた。こちらの手すりも描く曲線が美しい。

見上げていたアレイスターを促して、サー・エセルバートは街路から伸びる階段を上がった。察するに、1階が店舗、地下は工房なのだろう。

コロン、と来客を知らせるベルが鳴つた。ドアとのつなぎ目がわからぬこれも、優しい音色から判断して木製なのだろうか、とアレイスターは感心した。見事なものだ。

頭を垂れて出迎えてくれた栗色の髪の女性につられて、アレイスターは軽く会釈した。サー・エセルバートのように鷹揚に挨拶を返すような文化は、彼女も透子も持ち合わせていなかつた。

「いらっしゃいませ。

お待ちしておりました、エセルバート卿。

はじめまして、新しいお客様」

にこりと笑顔を返してくれた女性からは、げつ歯類のよつな歯がわずかに覗いて見えた。愛嬌があつて可愛らしい。

たいていの獣人は、人態をとつてもどこかに獸相が残るものだ。匂いからしてヒトではなさそうなので 魚人は、目は悪いが鼻はいい 彼女は栗鼠人かもしない。

ヒト科ヒト族ヒト亜族獣人属栗鼠。もつとも、獣人の血を濃く引いた、前歯が突出しているだけの女性かもしねないが。

ちなみにアレイスターはヒト科ヒト族ヒト亜族獣人属魚となる。通称魚人。残っている獸相は、手足の指の間に残る1センチばかりの水かき。おかげで手袋は直しが必要になる。

「本日は新しい依頼者をご紹ひいただき、その方が新しい魔道具を作成されるということによろしかつたでしょうか。

魔道具については、工房で職人たちと相談され、どういったものにするか決定されるのがよいかと思うのですが、いかがでしょう」「はい、よろしくお願ひします」

サー・エセルバートが支払うと言つていたので、彼が依頼者かと思つていたのだが、どうやら違う紹介がされていたらしい。

紹介者であるサー・エセルバートの顔をうかがうと問題ないとばかりにうなずいていたので、おとなしく返事をした。もし支払えと言われたら足りるかなと不安になる。

どうぞこちらへ、と女性に案内され階段を降りていく。からり、とドアを開けた先は、アレイスターが工房だうと当たりをつけたとおり、数人の職人が作業をしていた。

顔を上げ、客を認めるときを立つてくる。老いも若いも入り混じり、

といった雰囲気がだが、席を立つたのは3人ばかりだった。

1人はサー・エセルバートと並ぶほど背が高いが、残りの2人はアレイスターの肩よりも低い。1人は胸よりさらに小さい。そのかわり、もう片方はえらくがつしりとした骨格で、幅はアレイスターよりもありそうだった。

背高さん、小柄さん、幅広さん、とアレイスターは仮に呼ぶことにした。

口火を切ったのは、幅広さんだつた。えらく人懐こい雰囲気の人だ。アレイスターは彼の蓄えられた立派なひげを見て、サンタクロースを思い出した。

「お久しぶりですね、エセルバート卿。

今日の依頼者はそちらのお嬢さんですかな

「ご無沙汰しています。

いつもすばらしい出来に感謝しています。

こちらが私の従妹のアレイスター嬢。

今回は彼女のために魔道具を作成していただきたい

「はじめてまして、アレイスター・ゴメスです」

フードを取つて顔を見せながら挨拶をすれば、目を丸くしたサンタクロース氏が相好を崩した。後ろでは、背高さんがヒュウ、と軽く口笛のような音を出し、小柄さんも目をまん丸にして顔を見ている。魚人が珍しいのかもしねない。

差し出された手を握り返せば、もう片方の手も添えて包むように両手で握ってくれる。職人特有の硬い大きな手だった。

「じりやあまた、綺麗なお嬢さんだ。

ワシはイムホテップ。

ホップと呼んでくだされ

「よろしくお願ひします、ホップさん」

挨拶は交わしたものの、ほつほつほ、といかにも好々爺といった様子のイムホテップ氏は、中々手を離さうとしない。さてどうしよう、とにかくこしたことした相手の顔を眺めながら困惑していたところ、後ろで、聴高さんが彼をつっこいた。

「ホップ、そろそろ変われ。

彼女も困っている

「なんじゃ、気が短い。

寿命が長いんだからもうちひつと待てい

「お前だつて変わんないだらう、それ」

言いつつ、イムホテップ氏はアレイスターの手を離さうとしないまま、脇をつついてくる背高さんとじゅれあいをはじめてしまった。

サー・Hセルバートや案内役の女性を見れば、ちょっと肩をすくめるような動作が見れた。

どうやら、いつものことらしい。困った。

「おこ、こんなところで喧嘩すんな。

密の前だぞ」

結局、仲裁してくれたのは小柄さんだった。彼が言えば、ほかの人もやつと引いた。どうやら、ここまでが予定調和のようだ。

「ありがとうござります」

「べ、別にお前のためじゃない

照れくさそうな彼の顔に、ああ、シンティってやつか、トアレイ
スタは思った。女の子ならともかく、おっさん（といつまど）の年には
も見えないが）のシンティは実に微妙な気分にさせられる。人間素
直が一番だ。

微妙な顔をしたのがわかつたのか、後ろの背高さんとイムホテッ
プ氏が顔を見合させてやれやれというリアクションをしたのが見え
た。

どうやら、ここまでが本当の予定調和だったようだ。やれやれ。

「改めて。

ワシがイムホテップじゃ。
ホップと呼んでくれ」

改めてと言つて再度手を握つたイムホテップ氏に続き、彼を押し
のけた背高さんがアレイスターの手を握つた。

「はじめてして。

ステファン・スクルドです。
ステップって呼んでね」

「はじめてして、ステップさん」

こちらに片手をつぶつて愛想を振りまくステファン氏に苦笑する。
よく見れば、彼の耳は葉のように大きくがつていて、アレイ
スターは気がついた。

「オレはジャン・ポール」

最後に手を握ったジャン氏は、田を畠わせれば恥ずかしそうにそらしてしまつ。

「はじめまして、」

と、アレイスターが返信をしている最中に、イムホテップ氏とステ芬氏が割り込んだ。

イムホテップ氏が肩に、ステフエン氏が頭に 上背があるから
ちょうどいいのだろうが、されたジャン・ポール氏は屈辱的だろう
腕をかけている。

「こいつはジャンプって呼んでやつてくれい」

「3人そろってホップ・ステップ・ジャンプさ。

魔道具店ホップ・ステップ・ジャンプによつしモー。」

このシックな店は、ホップ・ステップ・ジャンプと言つらじい。
じゃーん！と口で効果音を出しつつポーズを決めた3人 いや
いやではあるようだが、律儀にジャン・ポール氏もポーズをとつて
いる を見て、アレイスターはリアクションに困つた。

アホだアホだと思ったが、そんなことをおぐびにも出さない程度
の分別はある。ただ、大真面目に面白くもないネタをやつしている大
人3人を見ていたら。

「つぶ……」

アレイスターは、つい吹きだしてしまつた。

それがよかつたのか悪かつたのか。

妙に嬉しそうなイムホテップ氏とステフエン氏は、なぜか4人のポーズを考案し始め、少し照れくさそうなジャン・ポール氏もなぜか乗り気な様子で熱心にうなずいて会話が進み始めた。ちょっと待つたちよつと待つた！

「あの、私はちよつと…」

決めポーズに参加したくない、と抑えるように手をあげた状態で、振り向いた3人と目があつた。

…とても輝いている。

ああ、こういうとき、当たり障りなく断るにはどうすればよいのだ、とアレイスターは冷や汗をかいだ。職人は職人であるからして、例えここで気分を害してもきちんと仕事をしてくれるだろう。しかし、仕事を依頼する身としては楽しく仕事をしていただきたい。アレイスターは博士とある意味引きこもり生活をしていたため、対人能力が低い。何せ話したことがある人物も片手で足りるほどだったのだ。

そして透子は、なんといふか典型的な日本人だったので、直接的な断り方というのはまずしない。遠まわしな婉曲表現バンザイ。

ああ、視界の端でサー・エセルバートと女性が応接セットに腰掛、いつの間にかお茶を始めているのが見える。にこやかにこちらを見ている。

「…その、紹介者の立場ですので！」

躊躇いなくサー・エセルバートを巻き込むことにした。そう、自分ができなければ助けてもらえばいいのだ。

これぞ透子が社会人になつて身に着けた中、もつとも役立つビジネススキル。『面倒』ことはよろしく『解決法』である。投げ先は上司だろうが同僚だろうが部下だろうが、自分でなればどうでもいい。メリットとして『面倒』とはなくなるが、『デメリット』として人望を失つていく。かつこよく言えば諸刃の剣だ。

軽く目を見張つたあと、面白そうに笑うサー・エセルバートが見える。

3人はくるつと後ろを向き、サー・エセルバートを見た。素材を吟味する田になつてている。

「やりませんよ？」

「ひとつと例の笑みを浮かべてきっぱりと断るサー・エセルバートに、内心拍手を送る。

「やりません」

残念そうな顔をした彼らを見て更に念を押している。肩を下げる3人にはちょっと心が痛んだが、まあ仕方ない。

でも、サー・エセルバートがアホなポーズをとるのはちょっと見なかつた。

視界の隅で文字が踊る。

【面倒】と回避しました

【スキル「面倒」とはようじく】を取得しました

どうせなら、NOといえる日本人の称号がほしい。

アホなことをやつて時間をつぶしたが、3職人とアレイスタも、栗鼠嬢とサー・エセルバートの座つている応接セットに着いた。

お誕生日席に着いていた栗鼠嬢が、につこり笑つて紅茶と焼き菓子を薦めてくれる。美味しい。生活水準があまり変わらないのは素晴らしいことだ。

高い窓から入つてくる風が心地よく、市場の喧騒がかすかに聞こえてきた。

「…それで、じゃあ、改めて話しを進めさせていただこうかね」

軽く咳払いをしたイムホテップ氏の声に、アレイスタは姿勢を正した。

魔道具といつのは、特に量産版でないものは、非常に高価なものだ。

量産版は、家電のような扱いで庶民層にも馴染んでいる。が、それも服でいうならフレタポルテ。一般庶民から見れば高い。

それが量産版でないとどうなるか。アレイスタは値段に検討もつかなかつた。株やダイヤモンドのようなものだろうか、とは思ひ。思ひはするが、いざれにも馴染みのないアレイスタや透子には相場がまつたく分からない。

ただ、ふざけていいものでもないだろ?、といつ認識だ。

そんなアレイスタに、席に着いたメンバーが軽く苦笑した。イムホテップ氏が言葉を続ける。

「はじめに、全体の流れと、今日の打ち合わせの流れ、この2つの

進め方を決めませんかね。

まず、我々がよくやる決め方を説明させていただきたい。
問題なれば、今回もその流れにしたいと思つります」

いかがかな、というイムホテップ氏に、サー・エセルバートを少し見る。彼はあまり話に口を挟むつもりはないようだつた。普通に茶を飲んでいる。

私に決めろということかな、と頷く。

「はい。

流れを教えていただけますか」

イムホテップ氏が説明してくれた流れは、こういったものだつた。

全体の流れとしては、最短で3回の打ち合わせが必要。

1回目（今回、無料）。

依頼者が要望を伝える。

要望というのは、効果や利用イメージ、利用タイミングといったものの他、作成期間や値段。

要望を聞いて、職人たちは実現性検証を行い、見積もりを作成する。

見積もり作成は一律300ルラン。

この段階で実現が難しそうだったら、職人はそう伝えるので、見積もり依頼しないほうがいい。

2回目（大体1週間以内）。

見積もりを元に、依頼者の要望と条件のすり合わせをする。
ここでG.O.サインが出たら、職人は作成に取り掛かる。
その後3日以内に、依頼者は前金を支払う必要がある。

3回目。

作成された魔道具を依頼者が確認する。

「…いつもは、こういった流れです。

どうですか」

正直、時間はかけたくない。それに、見積もりにかかる値段を言
われてもよくわからない。普通はどれくらい時間がかかるのか、人
件費がどれくらいか、技術料がどれくらいか。相場がわからないし、
こういった場合に値切るものかさえ判断できなかつた。

確か、博士と2人、1週間分の食料を届けてもらつたのに、レネ爺
さんにお礼の食事と手間賃の30ルラン、食料代の150ルランを
ミス・リップに払つていた。…からまあ妥当そうだと思つ。思つが
よくわからない。

よしー!とアレイスターは決めた。

考へてもわからぬので、考へないでいいだろ?。何かあつたら
サー・エセルバートがケチをつけるんじやなかろうか。茶をすすつ
てるのだからそれくらいしてくれてもいいだろ?。あんまり時間が
かかるなら旅先に送つてもらつてもいい。

「…こり笑つてうなづく。

「その進め方で問題ありません。
本日はよろしくお願いします

視界の隅で文字が踊る。

【検討事項をスルーしました】

【今までスルーした検討事項の通算が300になりました】

【スキル「不見^{スリー・ワイス・モンキーズ}、不聞^{モントン}、不言^{モングクズ}」を取得しました】

…見えない、見えない。

「ありがとうございます。」

あとは、今回の打ち合わせで、要望の魔道具の性質に合わせて担当者を決めたいと思つております」

この場にいる3人は得意分野が違うのでね、と 髪をなでながら頷いたイムホテップ氏の言葉を、ステフエン・スクルド氏が継いだ。

「ホップは武器、エセルバート卿の持つてる武器なんかは彼が面倒を見る。

僕は防具で、ジャンプは何でやるよ

なんとなく、人物と得意分野が合つてない気がしたが、アレイクスは口には出さなかつた。

いかにも穢やかな幅広さんことイムホテップ氏は攻撃的でないし、軽いおどけた雰囲気の背高さんことステフエン・スクルド氏は守りになど入りそうにない。シンデレ小柄なジャン・ポール氏は要領が悪そうだ。ただ、彼は器用貧乏^{モジカズ}というとしつくりくるかもしれないが。

ちなみに、と笑つて田の前のステファン・スクルド氏が続けた。
ばちん、と氣取つて片手をつぶつて見せる。

「君が所有することになった、ロザリア博士の『お下がり下郎！』0

「1号」は僕の作品だよ。

大事にしてね

「聞き間違いだらうか、とアレイスターは思った。

「はい?」

「魔道具だよ、銀色の懐中時計の形をした」

なるほど、OSGGR-01という型番は、そういう意味だつたらしい。

亡くなつた博士の容貌を思い浮かべたアレイスターは、似合つていると頷きそうになつたのを押さえ、あいまいに微笑んだ。

日本人的なお茶の濁し方で何が悪い、と思う。大丈夫、視界の隅で文字が踊つても気にしない。無難な人生万歳。

「...実は使い方がよくわからないので、後で教えていただけますか?」

「了解しました、お嬢様」

おどけた仕草で笑つてみせるステフュン氏に、お願いしますと頭を下げた。

話が進んでいる間に、ちょっとと考えた風のジャン・ポール氏が、お弟子さんの1人を呼んで指示を出した。お弟子さんがなにやら機材を運んできた。小さな水晶玉がつながつていてる箱と、ペンのよつなもの。これも魔道具だらうか。

「では、要望をお聞きしましょつか」

「はい。

私は、同胞を探すために、旅に出ようと考えています。

それで、身を隠すための魔道具を「

持つておけとサー・エセルバートに言われました。とは言えない。
と、サー・エセルバートが口を挟んだ。

「…その、彼女のステータスを見ながらにしませんか」

アレイスターが水晶玉に手を置いたら、箱のようなものから光が飛び出し、壁に文字が映し出された。なるほど、この魔道具は映写機^{プロジェクタ}的な使い方をするものだつたらしい。では、あのペンのようなものは指示棒^{ポイント}のようなものだろう。

ステータスを見た人々は、特に何も言わなかつた。
たぶん、彼らはすでに知つていた。ただ映し出したほうがズレもなくなるし、アレイスターも参加できるから都合がよいと判断したのだろう。

…と、思ったのだが。

正直、ステータスを見たのが初めてのアレイスターも、ゲームを知らない透子も、見てもなにも分からぬ。だつて平均を知らないのだ。せいぜい、自分のステータス内で、これが高くてこれが低いんだなーということしか分からぬ。

誰か解説してくれないかな、とちらりと視線を上げる。

壁近くに座っていたイムホテップ氏とサー・エセルバート、栗鼠嬢は壁の文字を見たまま、目の前に座っていたステフエン・スクルド氏がなんか目をそらした。横のジャン・ポール氏を肘で突いてい

る。ジャン・ポール氏は嫌な顔をして身じろぎしていたが、アレイスターが見ていたことに気づくと軽く咳払いをした。

「…」の時点で、どうやら彼らは、アレイスターにステータスの説明をしたくなかったのだ、と気づいた。

「ええと…。

魅力と…運、を。

何とかしたほうがいいんじゃないかな？」

「…やっぱりそう思いますか」

サー・Hセルバートが同意の声を上げた。

「普通に生活を送る分には、なんとかならなくもない…かもしれないがね。お嬢ちゃんは、一人で旅をする予定なんだろう？

なんとかしといた方がいいだろうなあ」

イムホテップ氏が、髪を撫でながら同意した。
ステファン・スクルド氏が、うんうんと頷く。

「誰かしら一緒にいてくれればいいけどねえ。

1人だと寄つてくる面倒」とを回避するのもしんどいんじゃないかな。

本当は、何か攻撃手段も作ってあげたいけど…」

腕を組んで、イムホテップ氏がうめく。

「…」れは、ちょっとなあ…。

「…」ちよつと、なんとかならねえか

サー・エセルバートが頭を下げた。

「すみませんが、もつちよつとなんとかしてあげてください」

ステファン・スクルド氏が同意した。

「僕も、もうちょっとなんとかしてほしいなあ。

『お下がり下郎！-01号』はそこまで頑丈にできないんだよ。
あんまり頻繁に使われたくないなあ」

ジャン・ポール氏がわめいた。

「それはもうちょっと頑丈に作っておけよ！

それに、なんで全部オレに言つんだよー！」

すみません。

なんだかよくわからぬいけど、もつちよつとなんとかしてくださ
い。

でも、どうやら担当はジャン・ポール氏に決まりそうだったので
は、アレイスターにもわかった。

009 もひがよつとなことかしだへだせこ（後書き）

腹が痛くて痛くて痛くてひよつとして腹に噛まれてこらのでむと考
えております。なぜやじまで噛む……

今回ひよつと感じですね。
ステータスは一応考えたけど文字を食つので見送り。そのうちその
うひ。

010 アレイスタのステータス

ステータスとは、概要、加護、称号、スキル、能力値といった、その個人に付随した項目をまとめて指す。

概要是、氏名、外見的な特徴や年齢、適応属性といったものが記されている。

加護は、神から与えられるもので、能力値への補正および副次効果が与えられる。大抵は、運と何か。

ちなみに、神は主に2種に分かれる。幸運を与えてくれるものが善神、悪運を与えてくれるものが悪神である。

称号自体は大した意味はない。なんらかの条件を満たした場合に与えられる。称号取得がスキル取得の条件になつている場合が多い。

スキルも、取得自体は称号とあまり変わらない。

常時発動型と逐次発動の2種に分類される。スキル自体にレベルが設定されており、レベルが上がるほど効果が大きくなる。効果はさまざま。能力値への補正もある。また、スキル自体が成長するものも多い。

能力値は、個人の能力を数値で表したものである。これは、種族特性に基づき生まれつき割り振られたものが元だが、その後の生活や訓練により成長がある。当然、逆に退化もある。

また、加護やスキルにより補正が入る。

…と、ジャン・ポール氏が説明してくれた。

どうやらいわゆるステータス画面で確認できるものが、一すべりでステータスと呼ばれているようだ…。

魔道具で壁に映し出されたステータスを眺めながら、透子の記憶を元にアレイスタは考えた。多分、個人で確認できるようになると、いつのも、ステータス画面のことなのだろう。アレイスタはできないうが。

ジャン・ポール氏が言いにくそうに解説してくれたアレイスタのステータスは、ようするに、こいつなものだった。

人ごみにいれば、魅力のせいです立つ。

運が人よりひどく悪いので、特に幸運がまつたくないのではなくか問題があれば大抵巻き込まれる。

面倒ことに巻き込まれても、残念。

攻撃を受けたとしたら、直接攻撃であれ魔法攻撃であれ、感覚が鈍いので、当たつてから攻撃を受けたことに気づく。そして、体格に恵まれていないので、攻撃が当たつたら多分アウト。

じゃあ先手必勝で先に何かできるかというと、これもまた残念。直接攻撃を行うには、感覚が鈍いせいで的に当たらない。そして、力が弱いので当たつてもあまり意味がない。

魔法攻撃を行うにも同様に鈍さがネック。魔力はあるのに、どうも、魔法という感覚自体になれてない。

「…と、こう感じ、なん、だ、が…。

はつきり言つと、バランスが悪いといふか。

残念といふか…。

…その、まあ、何だ。

元気出せよ！」

聞いたステータスの特徴は、甥っ子が言つたとおりだった。

気の毒そうに、こちらを気遣うように、ちらちらと向けられる視

線が痛い。

空気が重い。

が、それを完全に無視したように、イムホテップ氏が気楽な声を出した。

「しかし、お嬢さんは変わった称号やスキルを多く持つてるねえ。
いらっしゃへん、」

といいながら、イムホテップ氏が壁に映し出された文字をさしたのを見て、あれ、ヒアレイスターは首を傾げた。他と違つて詳細が写されない。

「詳細が公開されとらんじ、ワシは見たことない。
なんだろうねえ」

指された先の項目としては、称号「N姫」、靴の中の石」、コニクスギル「控えよ僕」、「八尾比丘尼の素」の4つ。能力値補正以外については詳細がわからぬ。

わからないが、なんとなく予想がつくものもある。が、言ひ氣はならなかつた。

大体、「八尾比丘尼の素」って。食われる前提じゃないか。

苦笑いを浮かべるしかない。

「…その、あの、でも、珍しいですよ！
普通、5つも加護を持っていません」

その場の空氣を換えようとしてか、栗鼠嬢がなんとかフォローのための言葉をつむいでくれたのだが。

「いや、でもこの「血口愛の神の偏愛」は微妙じゃないかね。
この幸運の項目を見ると、マイナスの加護になつとる。
こっちの3つがなかつたら0以下になつとるぞ」
「たしかに、こっちの3つは、それぞれ氣の毒に思つた神々が何とかがんばつたつて感じだよねえ。
「生きている不思議」なんて称号、初めて見たよ」

イムホテップ氏がぱつさりと切り、ステフュン・スクルド氏に止めを刺された。栗鼠嬢が横目でにらんでいるのにも気づいていない。目の前のジャン・ポール氏は頭を抑えている。きっと2人とも、職人特有のスキル「—AKY（あえて空氣読まない）」を身につけているに違いない。

「ここで話題にしているとおり、アレイスターには5つの加護がついている。

「自己愛の神の偏愛」で悪運+5と幸運-3されたのを、「トイ

レの神の慈悲」、「洗濯の神の同情」、「芋の神のお情け」がそれ幸運をひとつずつ+1してくれている。もうひとつは、「貧乏籠の神の寵愛」で、これは悪運を10上げている。

副次効果もぱっとしない。特に、悪神の2つ。「貧乏籠を引くとき、必ずアタリを引くことができる」「かつこいいポーズを取って、相手を挑発することができる」なんて、何に使うのだ。

「ね、このかつこいいポーズって、やってみてよー。」

明るいステファン・スクルド氏の気楽な声がいらっしゃる。彼は常時発動の挑発スキルを持つてゐんじゃないだろ？

寒くなつてきましたね、と栗鼠嬢がさりげなく席を外した。言われて見れば少し肌寒いし、何か起きたのか通りが騒がしい。いそいそと高窓を閉め始めた彼女の空氣読みスキルは高いのだろ？

「ええと、巻き込まれるのは前提なんですか？」

アレイスターが尋ねると、ジャン・ポール氏が顔をしかめた。

「これだけ運がないとなあ…。」

巻き込まれた後は、これは文句なく高い知力を活かし、何とか交渉で活路を見出すのがいいんじゃないかな

「…まあ、いざとなつたら、トイレに隠れて歌えばいいですよ」

と、スキルを見ながら慰めるようにサー・Hセルバートが言った。彼が見ているのは、スキル「トト」と「ローレライの歌」だ。

「トト」は、水周りのトラブル解決のほか、水周りにいれば相手の敵愾心をそぐことができるという。

「ローライの歌」は、対象を誘惑することができる。実際、アレイスターができる最大の対処はこんなところだらう。トイレの神様様である。

「やっぱり、運と魅力が最大のネックだな。これを何とかしないと」

ジャン・ポール氏が腕を組んで考え込んだ。他も異論はないようだが、アレイスターは釈然としない。

「その、そんなに私は運がないんですか？今まで普通に生活できていましたし」

「さつきも言ったが、

これだけ運が悪いと、何か起きたら間違いなく…」

「きやあああああ！」

と、高窓を閉めていた栗鼠嬢が悲鳴を上げた。

なんだ、と振り向く間もなく、思い切り体を引き倒される。目の前にぞつと何かが突き出された。白い羽がぱつと舞う。

アレイスターは、一瞬遅れて、それがジャケットに包まれた腕だと気づいた。サー・エセルバートが、横に座っていたアレイスターを引き寄せて、襲来した何かからかばつてくれたらしい。

襲来した何か。

カツとローテーブルに着地し、コケコツコーと高らかに啼いたのは、ごく普通の鶏だった。

「どうやら市場から逃げ出したらしい。

「…やっぱり、運と魅力が最大のネックだな。

これを何とかしないと。

これだけ運が悪いと、何か起きたら間違いなく巻き込まれる

「…はい、お願ひします」

高窓から進入し、サー・エセルバートに払われた鶏は、なぜか羽ともアレイスターの膝の上に収まった。
上機嫌で時々啼くのがうるさいし、食い込む爪が痛い。

視界の隅で文字が踊る。

【鶏に気に入られました】

【鶏、猫、犬、ロバのそれぞれの種族に気に入られました】

【称号「フレーメンズ・ディア家畜たちのお気に入り」を取得しました】

【スキル「フレーメンの指揮者」を取得しました】

そういうえば、宿屋で犬猫になつかれて、来る途中にロバに甘噛みされたな、とアレイスターはぼんやり思い出した。

「おや、増えたのう」

「ねえ、このフレーメンの指揮者ってやつてみてよー。」

気楽な声に殺意が沸いた。

010 アレイスターのステータス（後書き）

今日の昼は肉ませんでした。

華正樓のやつでした。ブルジョアです。

でも、いまいち上手く食えず、肉と皮が分離します。
コジッてあるんでしょうが。

関係ないけど、今回はなんか難産でした。ステータス貼っちゃえばいいんでしようが、そんなの読みたくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5258x/>

魚人転生者と召喚被害者

2011年11月30日19時45分発行